

幽門輪温存臍頭十二指腸切除術後の胃排出能と栄養状態の変化についての前向き無作為臨床試験：前結腸経路と垂直後結腸経路十二指腸空腸吻合の比較

学位名	博士(医学)
学位授与機関	宮崎大学
学位授与番号	17601乙第48号
URL	http://hdl.handle.net/10458/4883

論 文 要 旨

博士課程 甲・㉔	第 48 号	氏 名	今村 直哉
<p>[論文題名] Prospective randomized clinical trial of a change in gastric emptying and nutritional status after a pylorus-preserving pancreaticoduodenectomy: comparison between an antecolic and a vertical retrocolic duodenojejunostomy. HPB 2013 Aug 29. doi: 10.1111/hpb.12153. [Epub ahead of print] (幽門輪温存膵頭十二指腸切除術後の胃排出能と栄養状態の変化についての前向き無作為臨床試験：前結腸経路と垂直後結腸経路十二指腸空腸吻合の比較)</p> <p>[要 旨] 【背景と目的】胃排出能遅延 (DGE) は、幽門輪温存膵頭十二指腸切除術 (PPPD) 後に 5~60% で発生する主要な合併症の 1 つで、患者 QOL の低下を招き在院期間延長をもたらす。DGE を予防するための再建法として、十二指腸空腸吻合の前結腸経路再建が有用とする報告が多い。一方、当教室では胃を横行結腸間膜左側から直線的に配置した垂直後結腸経路再建が DGE の予防に有用と報告してきた。今回、PPPD 後の再建経路と DGE との関連を明らかにするため randomized clinical trial (RCT) を行った。また、術後 1 年間にわたり胃排出能及び栄養状態の経時的な変化を追って、再建経路の影響を検討した。【方法】2005 年から 2010 年まで当教室で施行した幽門輪温存膵頭十二指腸切除術 129 例を対象とした。全て再建は Child 変法で行い、対象を再建の際に封筒法で無作為に前結腸経路再建群 (A 群) と垂直後結腸経路再建群 (VR 群) に割り付けた。最終的に A 群 58 例、VR 群 58 例の計 116 例を解析した。DGE の定義は International Study Group of Pancreatic Surgery (ISGPS) の分類を適用した (術後 3 日以上経鼻胃管留置もしくは 7 日以降の固形食摂取困難例を DGE とし、重症度に応じて Grade A, B, C に分類)。また、胃排出能検査として、13C 呼気試験を術前及び術後 1, 3, 6, 9, 12 ヶ月の時点でを行い、同時点で患者の栄養状態を血液検査、膵機能検査、体重を指標として両群間で比較した。【結果】両群の患者背景には差を認めなかった。ISGPS の定義に基づく DGE の発生は A 群 7 例 (12.1%)、VR 群 12 例 (20.7%) で、DGE の発生は VR 群に多かったが有意差は認めなかった。胃排出能検査の結果では、術後 1 ヶ月の時点で、VR 群が A 群よりも胃排出能が遅延していたが、両群間に有意差を認めなかった。一方、術後 3 ヶ月以降の経時的変化では、VR 群の胃排出能は術前値に近似して推移したが、A 群は全時点で亢進しており、術後 6 ヶ月で有意差を認めた。栄養状態の比較では、血液検査、膵機能は両群間でほぼ同等であったが、VR 群で術後 12 ヶ月で有意に体重回復が良好であった。(術後体重/術前体重比; A 群: 93.8±1.2%; VR 群: 98.5±1.3%, P=0.0148)。【結論】DGE の発生は VR 群と A 群との間に差を認めなかった。VR 群は A 群と比較し胃排出能が亢進しすぎないことにより術後 1 年経つと栄養状態が良好な可能性がある。垂直後結腸経路再建は PPPD 後の有用な再建術式の 1 つと考えられる。</p>			

備考 論文要旨は 1, 0 0 0 字程度にまとめるものとする。